

佳作

## ヘンギン・ハドル

山霞雨

言葉の雲に濡れるような薄曇りの朝、コップに溜まった静寂を見つけた。わたしはそれを飲み干した。

十月、朝の教室で、遙花は不思議そうな顔をした。静寂をのんでしまって、声が出ないのだと紙に書いて伝えると、なるほどという。

「校門のところで陽だまりを踏んじやってさ」

そう言つて陽に濡れた靴下を見せてくる。ほんのりと明るい染みが点々と撥ねている。

「まあこれから雨の予報だから、すぐに乾くとは思っただけで、靴下暖かくなっちゃって、変な感じ」

自分の机に靴を置いて、おはよう、と近づいてきた香菜には遙花が説明をしてくれる。

「静寂をのんじやったんだってさ」

わたしは無言で頷く。

「寝起きで水と間違えたんでしょ」と言つて香菜は笑う。

わたしも無言で笑う。

「ねえねえ聞いてよ、さっき陽だまりを踏んじやってさ」

「あ、ほんとだ、曇りなのに運が悪いねー」

「でしょ？ ほんと、まいっちゃう」

「ねえ聞いて」

「ん？ なになに」

「塾の宿題がまたドツチャリでちゃって、ほら、二十ページもあるの」

「ホントだ、キツイね」

「でしょ？」

適当にうんうん、と頷く。

「その点、サキはいいよね、頭良いし」

遙花が話を振ってきて、わたしは首を横に振って、手を扇いで否定のジェスチャーをする。

「そうそう、それで、この問題が分からないだけじゃ」

「それ、わたしも分からない」

「だよー」

そう言つて二人は笑っている。わたしは笑っていいものかし少し迷つて困つた顔をする。「だよね」で安心しちゃ駄目だと思っただけ。でもそれを言ったところで彼女らは「サキはいいよね」「わたしたちは頭悪いし」に持つて行ってしまふし、そもそも今日は声が出ない。普段からちよつとした隙間に忍び

込んでくる疎外感が、今日はハッキリ感じられる。もしかして、わたしが喋る必要なんて初めからなかったのかもしれない。だって、ほら、会話はちゃんと二人の間で続いているし。

学級委員がチャイムの二分前を告げた。この学校ではチャイムの一分前には全員が席に着いていないといけない。めいめいに塊を作っていたクラスメイト達が慌ただしく散らばって、机と椅子のガタガタという音が教室中に満ちる。

朝の出席を取りに来た久田<sup>ひさた</sup>先生は無言で手だけを挙げる私に怪訝そうな顔をして、遙花<sup>はるか</sup>が代わりに事情を説明してくれた。一時間目は数学、

薄暗い教室には退屈が時折浮かぶ。数学の山岡<sup>やまおか</sup>先生は授業中に欠伸をすると怒るので、みなこっそり大口を開けるのだけけれど、うっかりすると浮かんでいる退屈の位置でバレてしまう。

「授業がつまらないのは分らないからだ。何故分らないのか、それは真面目に聞いてないからだ。俺はお前らのために授業をしているんだから、お前らもちゃんと聞け」

目立つ退屈を浮かべてしまった堀内<sup>ほりうち</sup>に山岡先生は顔を顰める。

そうなのだろうか。授業の内容なんて教科書を読めばすぐに分かるわたしだって、こんなにも眠たい。少なくとも、この授業はわたしの為のものではないから、山岡先生の言う「お前ら」にわたしは含まれていないのだろう。わかりきった板書の内容を写しながら、口の中で欠伸と退屈を一緒くたにかみ殺す。これが驚くほどに、何の味もしないのだ。かみ殺される欠伸が悲

鳴の一つでも挙げるなら、教室には断末魔が満ちて、山岡も自分の授業がつまらないと認めるんだろうな、と考えて少しだけ愉快になる。

二時間目も同じように過ぎて、三時間目の途中に白原<sup>しろはら</sup>さんが登校してきた。彼女はいつもマイペースだ。学校に来る時間もまちまちなら、来ない日もあるし、来たところで大体は窓の外を眺めているか、寝ているか。宿題だってまともにやってきたことはあまりない。

それでも成績はそれなりに良いらしく、先生達もあまり厳しくは注意しない。

正直なところ、彼女の気ままささが羨ましかった。わたしも本当は、授業の時間を大人しく座り通していたくなんてないし、朝起きるのが毎日面倒で堪らない。でも、わたしが彼女と同じ事をしようとするれば、異常事態になってしまう。彼女にとつての日常は、わたしにとつてある種の異世界で、いつも美しい孤立を纏っているように見えるのだった。

彼女が登校してからも、何事もなく一日は過ぎる。蝸牛のようなじれつたさで時計は回る。

六時間目、今日最後の授業は学活だった。十一月の合唱祭に向けた曲決めが行われた。

合唱祭委員の上野<sup>うえの</sup>さんと西山<sup>にしやま</sup>君が取り仕切って、曲名が黒板に列挙されて、ラジカセで候補の曲を流した後、多数決がとられる。

「わたしとしては、この曲がいいと思うんですけど」

と上野さんが、裏表のある可愛い笑顔を貼り付けて言う。控えめに歌いやささなど理由を挙げていくが、実のところ彼女がやりたい歌を推しているだけ。実際に今日の曲決めの前から、上野さんがリーダー格のグループで「この曲いいよね」「うん、いいよね」といった形で談話が成立しているのだ。男子はもともと合唱に乗り気じゃない子が多いから、なんとなく多数派の方に手を挙げる。あっさりと曲決めは終わった。

宿題に使う資料集を忘れて、校門を抜けた辺りで引き返した。白原さんがいた。日光もとうに褪せたオレンジ色の教室で、ぼんやりと髪を指先に巻き付けている。

「河野さん、どうしたの？」

彼女が話しかけてきたので、わたしは大変驚いた。それ以前に、名前、覚えてくれてたんだ。クラスメイトの名前さえ、覚えなくても不思議じゃないとは思っていた。

「社会の資料集忘れちゃって、宿題で使うのにさ」

「ふうん。そうだ、声、もうでるんだね」

「うん、さっき治ったんだ」

「ふうん」

自分から尋ねておいて彼女は興味なさそうに目を逸らす。無愛想な子だ。やはり、彼女は自由なのだと思う。

「嘘、実は昼から治ってたんだけど、喋るのが面倒くさくて」

「へえ、なんだか意外」

「そうっ」

「河野さん、いかにも優等生って感じたから」

「そんなことないよ」演じてるだけだよ。

忘れ物を鞆にしまつて、さあ帰ろうかというところで思いつきがあった。

「白原さん、帰る方向同じだったよね？ よければ一緒に帰らない？」

彼女は少し逡巡して、

「いいよ」

と素っ気なく言った。愛想のなさが好ましいと思った。これが他の子の場合、「いいよ」の後に「わたしも一緒に帰りたいなっと思ってたんだー」と続く。共感はずられる。そしてそれはいつも、サイズの合わない服か、おろしたての靴のようで、どこかが必ずわたしの形と少し違う。そういうしがらみを意識しない関係が欲しかったんだと思う。

会話が弾んだとは言えない帰り道だった。わたしが言葉を放つて、彼女は無視はしてないという程度に投げ返す。

「それ、ペンギン？」

白原さんのリュックに白黒のストラップがついている。

「コウテイペンギン。ペンギンは好き？」

「うん。子供のペンギンなんか縫いぐるみみたいで可愛いし」

「ペンギンが群れになってかたまってる映像を見たことある？あれ、ハドルって言うんだって」

その日、白原さんから喋ったことと言えばそのことだけだった。

家に帰ってハドルについて調べてみた。

コウテイペンギンは凍てつく夜を越すために、大きな群れを作ってかたまる。群れの外側は寒いので、外側のペンギンは群れの内側に行こうとして、群れのなかの個体は入れ替わりを続けるらしい。

ペンギンは、他のペンギンのことを鬱陶しく思っているかもしれない。みんな、寒い外側を嫌がって自分が内側に入ろうとする。生きていくためにはかたまって、ふれ合ってなければいけないけれど、隣にいるペンギンたちはみな他者に嫌なことを押しつけようとしていて、自分もその一羽なのだ。

その日はペンギンになる夢を見た。

次の日から、白原さんを誘って帰るようになった。昼間は話をしない。わたしは彼女と話をしたいけれど、彼女の方ではきつとわたしのことを少し鬱陶しく思っている。無理矢理踏み込むのだから、彼女の好む孤立まで壊してはいけない。

昼休みにはもう合唱の練習が始まるようになっていたけれど、そこにも白原さんはいなかった。給食が終わって、ソプラノとアルトがそれぞれかたまり始めるまでの僅かな隙間に、潜り込むように消えている。

ホントは合唱なんて嫌いだ。もともと声は小さい質だし、人前で歌を歌うというのは恥ずかしい。でも、周囲の響きを買いたくないから仕方なく練習はする。

こういうときに男子がすこし羨ましい。奴らは堂々と「面倒

くさい」と言えるし、サボる奴の方が多くくらい。女の子は「みんなで金賞を目指そうね」という仲良しアピールが必須なのだ。教室の背面黒板にも「みんなで力を合わせて、目指せ金賞！」と使えるチョークの色を全て使ってカラフルに飾り立てた文字が躍っている。遙花も香菜も合唱祭は楽しみにしているのでなおさら面倒だなんて言えない。

昼休みの後、午後の授業が始まると白原さんはいつのまにか教室にいる。

「雨が降っているときにやると、上手くできることが多いんだよね」

そう言って理科の柴田先生しばたが黒板に肺魚の絵を描く。

「いやあ、僕って絵心ないでしょ、でもね、肺魚だけは上手くいくんだよね、どうしてだろうね」

先生がそう言って黒板に書かれた魚に目を入れると、白い輪郭がブルツと波打って動き出す。出来の悪いプラナリアみたいな、マンガチックな肺魚はしばらく黒板のあつちこつちを動き回ってそれまで書かれていた文字を散らす。いくらもしないうちに動きは段々と鈍り、ピクリと痙攣すると動かなくなつて、消えてしまう。

「ほらね、肺魚もんだから、息継ぎができなくてすぐに消えちゃうんだ。現実の肺魚はこんな短時間じゃなくて、何時間か一回息継ぎをするだけだね」

黒板は即席の水槽から、ただの黒板に戻る。

外で雨が降っていたからか、この教室も水槽のようだと思つた。同級生の背筋は水草で、浮かぶ退屈は時折葉から立ち昇る気泡だ。真つ直ぐな水草も、ぐにやりと曲がつて動かない水草もあるけれど、どれも根が生えたように根元を動かさない。

そのなかで窓の外を眺めている白原さんだけ、水草に見えない。真似してちらりと窓を見ると、外が暗いので教室の中が鏡映しに見える。ああ、彼女はきつと、硝子越しにこの水槽を眺めているんだ。

彼女の目にわたしは水草だろうか？

わたしも彼女のように「外側」の住人になりたいと思つた。

これといつても何もないまま日々は過ぎる。

白原さんに一度だけ、どうして合唱の練習にこないのかと尋ねてみた。

「色々忙しい、というか正直面倒だから」

細々とした言い訳はせずに、彼女は面倒だと言いつつ切った。

「河野さんは合唱楽しい？」

「全然」

さつぱりと本音を言えた。

「ふうん」

彼女は変わらず素つ気ない。

白原さんはいつも帰りの号令が終わつて、みなが教室からぞろぞろと出て行つてから帰る支度をゆつくりと始める。中間テ

スト一日目の今日も例外ではなく、クラスメイトが今日のテストは出来が悪かったただの良かっただのと一通り喋り終えていなくなるまで待っていた。

誰もいなくなった教室で彼女はゆつくりとロッカーまで行き、鞆をとつて机の所に来る。机の中の教科書を取り出して鞆にしまう。授業を真面目に受けていないわりには、随分とぼろけている。

廊下に出たところで、上野さんと出くわした。

向こうは驚いた様子で、

「あれ？ 河野さんつて、白原さんと仲良かったっけ？」

と訊いてくる。

「うん、よく一緒に帰つてるよ」

「そうなんだ」

彼女はそう言つて、廊下を反対方向に歩いて行く。

咄嗟のことだから、「うん」つて答えちゃつたけど、白原さんからしたらどうなんだろう。わたしとはそんなに仲良くしてゐるつもりじゃないと、この子なら言いそうだ。

「ありがとう」と白原さんが言つて、わたしは大変驚く。

「うん？」

何か、礼を言われるようなことをしただろうか？

「ごめんね、あたし、河野さんのこと少し誤解してた」

「え？ 誤解つて？」

「河野さん、放課後に誰もいなくなつてからしか話しかけてこないから、安全圏から仲間はずれの子に話しかけてあげるわた

し優しい、みたいな子だと思ってた」

「そうなの？」

「うん。それに、最初に話しかけてくれたときなんか、上野さんの手先だと思つてて、ごめんね」

段々と飲み込めてきた。彼女はつまり、上野さん王国から嫌がらせ——いじめと言うのかもしれない——を受けていたのだらう。

「もしかして、いつも遅くまで残つてるのも……」

ボロボロだった教科書を思い出す。

「前に一回だけね、置き勉強してた教科書とノートずぶ濡れにされちゃつて、置き勉強めたら今度は机に落書きされて。それから教室に残つてる癖をつけたの。あの子のいるバレエ部が練習始めるまで待てば、あの子も手先の子も教室には戻つてこないから」

とつさに言うべき言葉が見つからなかった。

彼女は平然と、いつもの調子で言葉を続ける。

「ああ、これは去年の話ね。クラス替えの時、別のクラスにしてくれて先生に言つただけで、もうクラスは決まつてるし、『まさかあの上野が』つて相手にして貰えなかった。今年はどう直接嫌がらせしてくるとかはなくて、落ち着いてるんだけど、去年は仲良くしてくれてた子達も嫌がらせされてさ」

「そうだったんだ……」

「まずい子に話しかけちゃつたつて思つてる？」

「思つてないよ」

「そう？」

「上野さんがどう思つても、白原さんは白原さんだし」

「よかつた」と彼女は笑う。

この子つて、こんな笑い方ができたんだなと思つた。

二人ともなんとなく押し黙つたまま、分かれ道に来てしまつた。

「また明日ね」と言つた。

彼女は「うん」と答えた。

家に帰つて、明日のテストに向けて見直しをしようと社会科のノートを開く。あまり、集中できない。形だけ綺麗に整えられた文字の上を視線が横滑りして書いてある内容が頭に入つてこない。

白原さんが上野さん王国と敵対していると知つていたらわたしは、彼女に話しかけたらどうか。きつと話しかけなかったらうな。話したことのない他人より自分の身が大事だと思つただらう。そんな風に考える自分が嫌だった。

翌日はテストの最終日でもあり、また、朝と放課後の合唱練習が解禁される日でもあった。テスト終わりのチャイムが鳴つた瞬間、教室中に張り詰めていた緊張が跡形もなく解けて、あちこちから「終わったー」だとか「あー」だとかため息だとかが漏れ出す。

テストが終わるなり、白原さんはわたしの所に来て、

「図書室で待つてるね」

と言つて、素早く教室から出て行つた。

ここで彼女と一緒に出て行つて、いなくなれてしまえたら、と一瞬考えたところに遙花と香菜が来る。「やつと、合唱の練習に集中できるね」と嬉しそうに言うので、調子を合わせる。

練習が始まった。女子は白原さんがいつの間にか帰つてしまつたのと、運動部で大会の近い子以外は大体揃つている。男子はテナーもバスもパートリーダーと地味系真面目系が二人といつた有様で練習にならない。パートリーダーが少ない男子を相手に電子オルガンで音をとつて歌わせようとするけど、集まつている男子がみんな声の小さい連中で、互いに恥ずかしがつて声量が出ない。合わせようとした音程は拾う側からこぼれて、床に落ちる前に消えてしまう。

女子の間にも不均衡はある。どうしてかアルトはわたしを含めて地味な集まりになるし、ソプラノと違つて主旋律でもないので音程をとるのにも時間がかかる、音程が覚えないので声量もでない。

「ねえねえ、アルトもそろそろ音取り終わつたよね」

上野さんが森さんに尋ねる、森さんというのはアルトのパートリーダーで上野さん王国の一人だ。森さんは

「うん、大体はね」

と曖昧な返事をする。

「それじゃあ、女子だけでちよつと合わせてみようか」

そう言つて彼女は有無を言わず指揮を振り始める。

結果は案の定無残なもので、アルトは歌い出しの何小節かで

主旋律に釣られてしまい、一度崩れた後はもう声なんか出ない。

「うーん、ちよつとアルトは声量が足りないね」

上野さんが裏向きに笑顔を浮かべる。

「ちよつとアルトだけで歌つてみようか。声がしつかり出た人から抜けていこう。こういうのは、みんながしつかり声を出すのが大事なんだよ」

ああ、なるほどね。下唇を噛む。これは練習じゃないんだ。

楽譜の最後の方、まだ音程をきちんととりづらい辺りを指定して上野さんは、

「それじゃあ森つち、音取りお願いね」と指揮を振り始める。

「大川さん、抜けていいよ」

まず最初に、一番音程のとれて声量もある子が抜ける。アルト全体の声量が目に見えて落ちる。それから上野さん王国の子が抜ける。次々と人が抜けて、声の糸はどんどんとか細くなる。「抜けて良いよ」という順番には明らかな作爲があつた。いくらしないうちに残つているのはわたしと遙花と香菜の三人だけになつた。

教室の中でも大人しい三人だけでは、全員が気恥ずかしさに押されていつも以上に声量が出ず、声の糸はもう蜘蛛の糸より余程儂い。音の目安になるはずの鍵盤ハーモニカがやたらとけたたましく聞こえて、音が分からなくなる。

上野さんが「草野さん、抜けて良いよ」と言つて、遙花ちゃんが抜ける。次に「青井さんも、抜けて」と言つて香菜ちゃんがいなくなる。

案の定わたし一人が残される。

「ほら、恥ずかしがらないでちゃんと歌って」

上野さんが手拍子をとる。恥ずかしくて声など出せない。

「森さん出だしてもう一回弾いて」

教室にいる子達の視線が全身に痛いくらい刺さる。顔がかーっと熱くなって、涙ぐみそうなのを歯を食いしばって堪える。時間がどんどん引き延ばされていく。

五回ほど森さんが出だしの小節を弾いて、それでも声を出せないわたしをみて上野さんは、

「今日はいよいよいいけど、ちゃんと音程を覚えて、声を出してね」と言った。

晒し者にされる時間が終わって、ほっとした束の間、上野さんがまた口を開く。

「ああ、それと、河野さん、白原さんと仲良かったよね。白原さんもアルトだし、練習に来てって言ってくれと嬉しいな。河野さんが誘ったらきつと来てくれると思うからさ」

自分が晒し者になるのが嫌なら、彼女を連れてこいという意味だろう。彼女の言う通りにしようとは思わなかった。

そんな理由で彼女の美しい孤立を壊してはいけない。チャイムが鳴って、放課後の練習時間も終わる。

鞆を持って帰ろうとするところに遙花ちゃんが声を潜めて話しかけてくる。

「ねえ、サキ、上野さんと何かあったの？」

「ううん、なにもないよ」と咄嗟に笑顔を作る。

彼女は疑わしげな目をする。

「その、あんまり白原さんと仲良くしない方がいいと思うの」

「どうして？」

「どうしてって、それは、ほら、ね？」

自分たちを巻き込まないでと書かれた顔を、「ね？」の部分でつつべらぼうに塗り替える。

「うちもそう思うな、去年、ちよつと大変だったんだよ」と香菜ちゃんがおっとり言う。

二人とも、言いたくないことを仕方なく言っている、という口調で話す。

そりやうちらだつて、こんなこと言いたくないけどさ、でもここはペンギンのハドルなんだよ、誰か、寒い外側を引き受けなくちゃいけない。でもそれが、うちらである必要はないでしょ？

言葉の裏が見えるなら、きつとそんな風に書かれているだろう。

「大丈夫だよ」

何が大丈夫なのかも分からないままそう言つて、二人と別れると急いで図書室に向かった。白原さんにはなにも話さなかった。

翌日、机の中に濡れた雑巾が入られていた。この程度、と思つて片付ける。その翌日、悪口の書かれた紙が入っている、冷たい言葉に手が濡れる。翌日は上履きに画鋲が入っている。画鋲を除いても悪意の棘が足を刺す。



放課後に決まって一回は上野さんの「声が出た人から抜けていこう」で残される。「みんな金賞目指して頑張ってるんだよ」と彼女は笑顔で言う。背面黒板にも「みんなで力を合わせて、目指せ金賞！」と書いてある。「みんな」ってなんだろう。少なくともわたしは、合唱でこのクラスがどんな成績をとっても気にしない。それなら、わたしは「みんな」には入らないのかもしれない。

それに、男子のほとんどはまともに練習へ来ない。彼らはやっぱりわたしと同じように、合唱などしたくないのだろう。少なくともクラスの三分の一は合唱なんてどうでもいいと思っていて、女子だって全員が乗り気な訳じゃない。それなら、金賞を目指したい「みんな」って誰のことなんだろう？

遙花ちゃんと香菜ちゃんも、自分からは話しかけてこなくなつた。わたしは一応は彼女らの忠告を無視している形になるし、そうなってしまつてまで、二人と仲良くしていたいと思えなかつた。登校と歌の練習は憂鬱だつたが、生暖かい泥に沈み込んでいくような、誰とも話さない日中は楽だつた。

自然、会話の相手は一緒に帰る白原さんだけになつた。

「あの後、上野さんから何かされてない？」と尋ねてみる。

「うん、河野さんは大丈夫？」

「大丈夫だよ」

「そう……」

彼女は少し思案したような顔になる。

「ねえ、あたしも合唱の練習、行った方が良いかな」

「どうして？」

「河野さん、なんだかんだ言いながら練習ちゃんと出てるし、やっぱり……」

「わたしは付き合いで出てるだけだから、白原さんは白原さんのやりたいようにやればいいと思うよ」

「そうかな」

「わたしこそ、いつも待たせちゃつてごめんね」

その日家に帰つてから、合唱練習に出て維持するような付き合いなどもうないのだと気が付いてしまった。誰もあの嫌がらせを止めもしないのだから、協力する義理だつてない。

翌日はわざと静寂を飲んで登校した。声は昼くらいに治つていたけれど、放課後は声が出ないという言い訳で、すぐに白原さんを追つた。

「練習行くの、面倒になつちやつた」

「そうなの」

「馬鹿らしくなつちやつて、あんなの」

「そっか」

朝も昼休みも放課後も練習はサボつて、3日ほどそんな日が続く。

「ねえ河野さん、やっぱり何かあったでしょ」

昼休みの図書室で白原さんが言った。

「……うん、実はね」

言つたら彼女に気を使わせてしまふと思つて黙っていたはずなのに、堰を切つたが最後、起きたこと、思った事、全部流れ

出してしまった。

「だから、もう練習なんて出なくていいでしょ」と捨て鉢に笑った。

白原さんはしばらく難しそうな顔をして、それから真面目な顔で、

「仕返ししよう」

言ってしまったから、ちょっとだけ愉快そうに笑う。

「仕返しって?」

「放課後、練習が終わってみんな帰ったら、教室に行こう。あの話はそれから」

放課後、無人の教室には机と椅子が綺麗に並べられている。窓際の席にはオレンジ色の陽が斜めに射して、その反射で教室中が夕焼け色に染められる。合唱の残響など欠片も見当たらない。空っぽだけ、長方形の部屋に満ちている。

教室に入ってしまった白原さんは黒板消しを二つ取って、そのうち一つを手渡ししてくる。一日分のチョークを吸って汚れた黒板消しだ。彼女はそのまま背面黒板に向かう。「みんなで力を合わせて、目指せ金賞!」と書かれた文字の前に立って、

「河野さん、右半分お願い!」と言って黒板の文字を消し始める。

白と黄色と、緑と青の混ざった擦り跡を残して、黒板の文字と、それを囲っていた飾りや寄せ書きめいたコメントを全部消した。致命的な空白だけ、黒板の上に残った。あの呪いのような言葉が、これだけあっさりと消えてしまうなんて。少しだけ

胸がすっとした。

「まだ終わりじゃないよ」

白原さんが笑った。

まつげの長い臉を細めて、唇の端をニツと上げて、白い歯を覗かせて笑う。褪せた夕陽に照らされて、顔の陰影がよいよクツキリとする。綺麗で、どこか残酷な表情だった。

彼女の手が、鞆から大きな裁ちばさみを取り出して、黒板消しの布の部分に突き立てる。

粉に汚れた黒い布に穴が開く。はさみをジョッキリと動かすと、その切れた布が内側から開いて、言葉が溢れ出す。

黒板消しが消してきた言葉、漢字がひらがなが、アルファベットが数字が、続々と溢れて床にこぼれ落ちていく。

「ほら、河野さんも」

はさみを右手で受け取って、左手に持った黒板消しと見くらべる。

躊躇するわたしの右手を、白原さんが両手で包み込む、体温が伝わる。

どちらの力で黒板消しを突き刺したのかは分からない。気が付けば、わたしの手は黒板消しの布を切り裂いていた。

二つの黒板消しは床に放り出されて、言葉の噴水は留まることを知らない。溢れた言葉は重なって、広がって、足に絡まる。

文字が海となって覆い尽くそうとする教室から、わたし達二人は手を取り合って逃げ出した。下駄箱でもどかしく靴を履き替えて、校門を出るまで誰にも会わずに走り抜けた。

ぜえぜえと荒い息をつきながら、どちらともなく立ち止まる。苦しそうに息をしながら、二人して笑った。

何をしたのかなんて、どうでもよかった。二人で走り抜けた爽快感に駆り立てられて、いけないことをした背徳感に背中をくすぐられて、ひたすらに笑った。

翌朝の教室は、綺麗に掃除されていた。放課後に見回りの先生が見つけて片付けたのだろうか、黒板消しも新品に取り替えられている。

「今日の朝の会はなしだ、学年集会があるから体育館に来るよ  
うに」

担任の久田先生が険しい顔で告げる。

教室にひそひそ声の漣さざなみが立つ。学年集会というのは大概が碌でもない報せだ。以前の集会では、学年で煙草を吸っていた生徒がいた、学生として不適切な行動は慎むようにという説教があった。今回は誰が何をやらしたのだろう、とみなが頭を回す。

きつと、昨日のあれだろう。

わたしと、珍しく朝から登校していた白原さんがコッソリと目配せをして笑った。

わたし達二人だけが、何が起こったのかを知っている。秘密のくすぐったさが心地よい。

全員が廊下にお行儀良く並んで、体育館に向かう。

二年一組から四組まで、体育館の広さには似合わない、ぎゅ

うぎゅう詰めの子じまりとした隊形で体育座りすると、学年主任の木崎先生がでっぷりとした体を揺らしながら現れる。

「みなさんの中に、昨日、放課後の教室で黒板消しを壊した人がいます」

先生は手に持っていた黒板消しを掲げてみせる。切り裂かれた黒い布から、前にテレビで見た、手術中の腹部みたいに内側のスポンジを見せている。中に詰まっていた言葉は昨日のうちに全部流れ出してしまったのか、もう何も溢れてはこない。

またひそひそ声が広がる。

辺りをキョロキョロ見回す子もいる。

わたしは神妙な顔をして座っている。後ろに座っている白原さんの様子は分からない。

「心当たりのある人は今でも、この後でもいいから名乗り出るように。名乗り出ない場合はここにいるみなさんの連帯責任です。一人一枚、反省文を書いてくるように。元はと言えば、みなさんが『最後に教室を出る人は教室の鍵を閉める』というルールをきちんと守っていないのが原因です。また、近頃は授業中に態度の悪い人も目立ちます。秋というのは中だるみしやすい季節ですが、学生らしい行動を心がけるように」

木崎先生はその後もなんだかんだと、実例を挙げつつ最近の「みなさん」がどれだけだらないかと言うことを実例を挙げつつ喋り続けた。

同級生達は大人しく座っているけれど、あちらこちらに不満が溜まっていくのが目に見える。先生はそれに気が付かないの

か、気が付かない振りをしているのか。

だって、誰がどう考えても黒板消しが壊れたのは、壊した犯人が悪いに決まっている。犯人が分からないからあなたがた全員のせいです、なんて乱暴な話だ。あれは、わたしと白原さんがやったこと、他の誰のものでもないはずの出来事が、木崎先生の一言で「みなさん」のせいになる。

誰も反対の声はあげなかった。先生相手にそれはおかしいと訴えたところで、「大人の言う事は素直に聞け」とあしらわれるのが精々だと諦めている。

教室に戻ってから久田先生が、これからは日直が教室の戸締まりをして職員室に鍵を返しに来るように、と告げた。それから、反省文の締切は明日で、原稿用紙に少なくとも八割以上は埋めてこないと一枚とは認めない、とも言う。

クラスメイトの大半は、うちのクラスだけ黒板消しが新しくなっていることから、黒板消しが壊されたのはうちのクラスだと察していた。男子の悪ガキグループが内輪で、「お前やっただろう」「は？ 今度のは俺じゃねーし」などと笑い事にしていく。この手の破壊行為は彼らの間では英雄的行為になるのだ。周囲の子達も、どうせあいつらの誰かか、その仲間だろうという目で見ている。真犯人を、少なくとも表立って疑ってくる人はいなかった。

わたしと白原さんは結局、名乗り出なかった。反省文は自分が犯人ではないという体裁で、教室の戸締まりについての反省を模範的に書いた。

後ろめたさはあったけれど、後々噂にされる恐ろしさと天秤にかけた。

それに、二人で秘密を抱えているという状態のくすぐったさが心地よくもあった。ふとした拍子に交差する視線が意味ありげなものになる。交わす笑顔の裏側に、同じ体温を感じる。

翌日の放課後、合唱の練習をいつも通りにサボろうと教室を出たところに久田先生が待ち構えていた。

「河野と白原か、ちょっと話がある」

そう言うって先生は職員室に向けて歩き始める。

心臓がばくばくする。

誰かに見られていた――

普段は立ち入ることのない職員室の空気は重たかった。体のまわり中から見えない力で圧迫される。深海の水圧というのはこんな感じがするのだろうか。

先生は自分の椅子に腰掛けて、机に片腕をのせる。

わたしと白原さんの目を順番に見て、わたし達二人の背筋が強ばる。

彼は自分の言葉が最も効果的に映えるタイミングを計って口を開いた。

「お前達、合唱の練習にちゃんとでてないらしいな」

なんだ、そのことかと安堵する。

「で、どうなんだ。練習、出てないんたろう？」

責め立てるのではなく論ずように、先生が「理解ある大人」の顔で白原さんと言うよりわたしの方に向かって問いかける。

「それは……」

「草野から話が合つてな、上野とお前の間でもなにかあつたみたいで、お前が合唱の練習に出てこないって」

「遙花ちゃんから先生に話が行つたと言うことだろうか。でも、もう遅いよ。今のわたしが先生に上野さんのやつたことを話すなら、黒板消しの件も話さなくてはフェアじゃない。」

「上野にも話を聞いたんだが——」

先生は続ける。

「——あいつも、練習の時に少し厳しくものを言ひすぎたかもしれない、今は反省してるって言つてたぞ。まあ、あいつはクラスで一番、一所懸命に頑張ってるから少し熱くなりすぎたんだらう。どうだ、ここは一つ水に流してやってくれないか」

「いったんは膨らんで破裂するかに見えた罪悪感に、穴が開いてしぼんだ。」

「ああ、別に責めてるわけじゃない。お前の気持ちも分かるさ、河野は真面目だからな、好きでサボつてたわけじゃないだらう？」

「……わかりました。明日からちゃんと出ます」

「それから白原も、お前のマイペースさは嫌いじゃないが、練習くらいきちんと出るように」

「はい」

「うん、それでいい」

久田先生は満足した顔でわたし達二人を解放した。

上野さんと、わたしと、二重に騙されていながら「お前の気

持ちも分かる」と言つた先生を心底軽蔑した。

翌日、六時間目の学活は合唱の練習に当てられるはずだったが、久田先生はパート練習の準備を始めたみんなを一度自分の席に座らせた。

「誰からとは言わんが、合唱練習にきちんと身の入つてない者がいると聞いた」

「誰からとは言わんが、合唱練習にきちんと身の入つてない者がいると聞いた」

「静かに聞け！ そうだ、今騒いでたお前らのことだ——」

まき散らされた怒声から気まずさが立ちこめて、教室中が窒息したように声を出さなくなる。

そのまま先生は、合唱祭の意義を語つた。

曰く、クラスみんなで同じ目標を目指して努力することの価値を学ぶために合唱祭はあるのだ。従つて、クラスの中に協力しない人、和を乱す人がいてはならないのだ。

その日から放課後の練習も先生が監視するようになった。

本番が二週間後に迫っていることもあり、誰もサボらなかつた。お調子者の堀内を中心にして、クルリと掌を返したように練習を始めた。

わたしと白原さんも、先生に予め釘を刺されていたこともあつて、練習に出なくてはいけなかつた。

「頑張ろうね」

白原さんと二人で隅にいるわたしに遙花ちゃんが話しかけてくる。

「うん」と答える。

「白原さんもね」と香菜ちゃんが言う。

嫌がらせも止んで、日中は以前の三人組に白原さんを加えた四人組で過ごすようになった。わたし以外の人と、楽しそうに喋っている白原さんを初めて見た。不思議な気持ちになる。これはいいことなのだ、と頭で分かっているのに、モヤモヤした気分になる。わたしの憧れた白原さんが消えていくと思ってしまう。

合唱の練習は順調に進む。金賞を目指す「みんな」の中でわたしは一人、取り残されたように小さな声で歌った。

一週間ほどが平和に過ぎた。

その日は雨曇りが一日続いて、十月末にしては随分と寒かった。

いつもの帰り道、もう白原さんとはすっかり打ち解けて、仲良く喋りながら歩いている。

日中も放課後も、クラスの中に取り込まれてしまうから、二人歩くこの道の上でだけ、「外側」にいられる気がした。彼女といるときだけは本音で話せる。

ひどく冷たい風が一息に吹いた。空気の流れが服の隙間を縫って、全身を冷やす。

「うう、寒いね」

そう言って、並んで歩く肩と肩をくつつける。

白原さんは、

「歩きにくいよ」と言いながら笑ってくれる。

そのまま少し歩いて、白原さんは言う。

「ねえ、最初に話したときペンギンの話したでしょ、覚えてる?」  
「覚えてるよ」

「南極は寒いから、みんなで固まって暖まるんだって。その群れをハドルって言うんだよ」

「うん、知ってる。あの後、調べたから。外側は寒いから、みんな内側に行こうとするんだって」

「うん、そうなんだ。みんな交替で寒さを引き受けて、代わりばんこに暖め合うんだよ。ペンギンはいいよね、きつとみんなで仲良く身を寄せ合ってるんだ」

「わたしは、ペンギンにはなりたくないな」

「どうして?」

「だって、あんな大きな群れの中にいたら、自分が誰だか分からなくなりそうだし、それに白原さんだっけとどこにいるのか分からなくなっちゃう」

「あはは、そんな風に考えたことなかったな。おもしろい」

笑う彼女から少し体を離して、目を見た。

「わたし、真面目に言ってるよ」

「え?」

彼女は首を傾げて目を合わせる。

「わたし、最初はね、白原さんのことを群れの外の子だと思ってたんだ。いつも一人で自由に過ごしてて、それが羨ましかったの」

「違うよ、そんなの。ただ、あたしは去年仲良くしてくれた子たちまで上野さんに嫌がらせを受けて、離れていつちゃったから……」

「うん、知ってる。でもね、わたし結構楽しかったんだ、白原さんと練習サボって一緒に帰るの。あの仕返しの日だって、ホントに楽しかった。わたし達二人だけ、無人島に取り残されてるみたいで」

「あたしも楽しかったよ」

「だから、ねえ、また一緒にサボろうよ。合唱の練習なんか抜けて、一緒に帰ろう？」

何の考えも無しに喉から出た言葉が口からこぼれて、二人の間に見えない罅がピシリと音を立てて走る。

「ねえ、それって……それってどういう意味？」

白原さんが声を震わせる。ああ、言っではいけないことを言ってしまった、と直感した。でももう、後戻りはできない。こぼれた言葉を拾い上げる術は、ありはしない。

「河野さん、酷いよ。それって、あたしは一人でいた方が良かったってこと？ あたし、やっと友達ができたのに……」

違うよ、とか、そういう意味じゃないよ、と咄嗟に言えていれば、何も変わらないで済んだのかもしれない。ちよつとした言葉のすれ違いが生んだ誤解だと白原さんは納得したかもしれない。

わたしは何も言わなかった。

「ねえ河野さん、そんなに合唱の練習が嫌なら、そんなにみんなと一緒にいるのが嫌なら、一人でサボればいいじゃない。そんな度胸無いくせに、自由にすごしてるのが羨ましいだなんて言っ、ホントは人に合わせるのが面倒なだけのくせに！」

怒りに尖った声が、今まで聞いたどんな言葉よりも深く、わたしの胸に刺さった。

何も言えない、返す言葉が何一つ思い浮かばない。

違う、違うの。わたしはそういう意味で言ったんじゃないの。そういうつもりで話してたんじゃないの。そんな言葉が両手の指の間からスルスとこぼれて、掌には触觉の残像だけが残る。それなら一体、わたしはどういう意味で話していたの？ どう違うって言うの？

こちらをジッと睨みつけながら白原さんは息を整える。それから、いつもより一段低い声で、わたしに言った。

「……ねえ、今の話はなかったことにしようよ。あたし、そんな話聞きたくなかった。今日は何もなかったことにするからさ、明日からまた友達でいて、お願い」

「うん、わかった。ごめんね」

わたしはやつとの思いで、そのあとずっと後悔することになる言葉を言った。

十一月に入り、表面上は変わらない日々が過ぎる。

わたしと白原さんは、昼間の四人組でも、放課後の帰り道でもお喋りをした。でも、そこには以前はなかった見えない壁がある。作り物の共感を浮かべて、なんとか維持されていること

を確かめるような、今にも切れそうな布きれに継ぎをあてていくような。

あなたが今仲良くしてる遙花と香菜は、あなたと仲良くするな、と言ったんだよ。とは口に出さない。この四人組は脆い。それでも、確かに白原さんの言ったとおり、一人きりになる勇氣などなかった。

合唱祭はどんどん近づき、練習もトントン拍子で進む。

上野さんは相変わらずニコニコとみんなの指導を続けて、みんなの歌は上手くなる。

男子も気合いが入って、低音がしつかりすると曲全体が土台を得たように安定する。

そうして本番の日がやってきて、みんなは練習通りに上手に歌ったけれど、結果は銀賞に終わった。

「みんなよく頑張った。先生はみんなの歌が学年で一番上手だったと思うぞ」

久田先生がみんなを褒める。クラスのみんなは金賞を取れなかったことに悔しさを感じながらも、練習通りに歌えたことに満足して喜ぶ。

「金賞獲れなかったのはちょっと悔しいな」と遙花ちゃんが言うて、

「でも、銀賞獲れたし、よかったじゃない」と香菜ちゃんが言う。「そうだね」とわたしと白原さんが調子を合わせる。

銀賞なんて言ったって、学年四クラスから金賞と銀賞が決まるんだから、二位なんて全くすぐくない。とか、初めから練習

に来て練習をした人も、本番二週間前に掌を返した人達も同じように頑張ったと言っても良いの、とか。そんなモヤモヤは、一度飲み込んでしまえば、時折喉がいがらっぽくなる程度で、あまり気にならなかった。

その日の帰り道、木枯らしが吹いた。  
長い冬が来る。